

愛媛大学図書館 2006年(開学記念日事業)企画展

鈴鹿文庫の貴重書  
—900年前の書物が語るもの—

会期 平成18年11月11日(土)～11月19日(日)  
午前10時～午後5時(土・日 開館)

講演・シンポジウム

会場 総合情報メディアセンターメディアホール

日時 平成18年11月12日(日)午後1時30分～

企画展示

場所 図書館3階 ラウンジ(エレベータ前)

# 愛媛大学図書館 <sup>すずか</sup> 鈴鹿文庫 蔵書

## <sup>すぎょうろく</sup> 『宗鏡録』 および <sup>ちゅうあごんきょう</sup> 『中阿含経』

### § 『鈴鹿文庫』 解説

鈴鹿家は京都市の吉田神社の社家として、中世以降卜部（うらべ）神道の伝統を継承してきた。鈴鹿連胤（すずか つらたね、1795～1870）は、近世後期に日本最古の辞書「新撰字鏡（しんせんじきょう）」を採求し、これを世に紹介した。連胤とその後裔は、文学関係者と交渉が深く、香川景樹（かがわ かげき、1768～1843）・小沢蘆庵（おざわ ろあん、1723～1801）などとも交渉があり、伊予の国学者矢野玄道（やの はるみち、1823～1887）もしばしば鈴鹿家を訪れている。

鈴鹿三七（すずか さんしち）は、連胤から四代目、京都大学で国文学を専攻し、大谷大学、ノートルダム清心女子大学、神宮皇学館大学教授を歴任し、関西の書誌学の開拓者と称されている。昭和42年、79歳で没した。

その夫人ゆきさんが元本学図書館長 井手淳二郎氏の妹にあたるというご縁で、その蔵書が本学に一括購入（一部寄贈）されることになり、これを「鈴鹿文庫」と称することになった。収集された蔵書内容は、総数7、432点で以下の多方面にわたる。

#### 1) 神道

卜部神道の家系だけに、さすがに貴重なものが多い。「日本書紀」の写本、版本（木版刷り）の収集は圧巻で、神代巻67点に及び、寛永版本から明治初期までほぼ完全に網羅している。「中臣祓（なかとみのはらえ）」「古語拾遺（こごしゅうい）」の版本の各版も多い。「日次紀事（ひなみきじ）」は、弧本で貴重である。

#### 2) 和歌

交わりの深かった香川景樹・小沢蘆庵らの資料は特に豊富である。その他、近世後期の歌集の版本100冊余、明治大正期の歌集160冊。

#### 3) 物語・随筆・日記等

源氏物語・方丈記・徒然草については旧蔵者は著書もあるので、それらの写本・版本・注釈書類は豊富に集められている。さらに複製本も多い。

#### 4) 国語学

「千手千眼陀羅尼經（せんじゅせんげんだらにきょう）」など、訓点資料の複製本が多く、入手困難な国語史研究上貴重な資料である。

#### 5) 書誌学

旧蔵者は、関西における書誌学の開拓者と言われるだけに、基本資料である各種書影の複製本がよく集められている。

また、宋版「西藏蔵経」などの稀本の版本も見られる。

諸書には、旧蔵者の手で、その伝来、関係資料との比較などがたんねんに記載され、またこれらを借覧した他の研究者からの書簡も添付されており、研究上貴重な資料となっている。他に印譜の収集、大正・昭和期の各種目録が約100ある。

#### 6) 外国語

Brian、Astons、Gurdert、Florenzなどの外国語訳の日本文学が収集されている。

#### 7) 美術

「白鶴帖」など大冊の複製画集、「書苑」「手ががみ」など書道関係の複製がある。

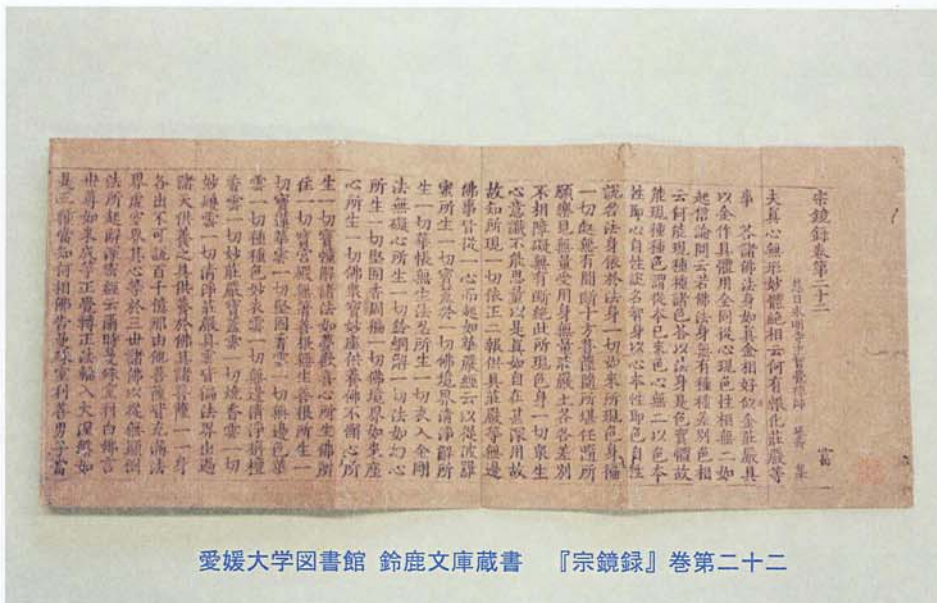
#### 8) その他

伝記・地誌など豊富である。また雑書とされるものの中にも、稀観本が多い。また伊予に関するものでは、矢野玄道、近藤篤山(こんどう とくざん、1766~1846)、半井梧庵(なからい ごあん、1813~1889)等の写本がある。

## § 愛媛大学図書館 鈴鹿文庫蔵書『宗鏡録』卷第二十二

中国の宋王朝（12世紀前半）の時代に刊行された版本（木版刷り）のテキストである。鎌倉時代中期、弘長元年(1261)に、金沢文庫(神奈川県横浜市)を創建した北条実時自身が中国に使者を使わし求め、一門の菩提寺である称名寺（しょうみょうじ）に寄進した宋版一切経（そうはんいっさいきょう）に含まれていたもので、歴史的に由緒あるものである。金沢文庫は、この「宗鏡録」も含めて宋版一切経すべてを国の重要文化財の指定を受けている。

昭和9年発行の「書誌学」2ノ5～6に、金沢文庫長の関 靖(せき やすし)博士の「金沢文庫書誌論考」（『金沢文庫研究紀要』第2号）が掲載されているが、その中にすでに鈴鹿三七氏所蔵の宋版「宗鏡録」巻22が、もとは金沢文庫の宋版「宗鏡録」全100巻の一部だったと言及される。したがって、現在、本学図書館が所蔵する「宗鏡録」巻22は鈴鹿三七氏が金沢文庫所蔵のものを昭和9年以前に入手したものと考えられるが、その経緯は不詳である。



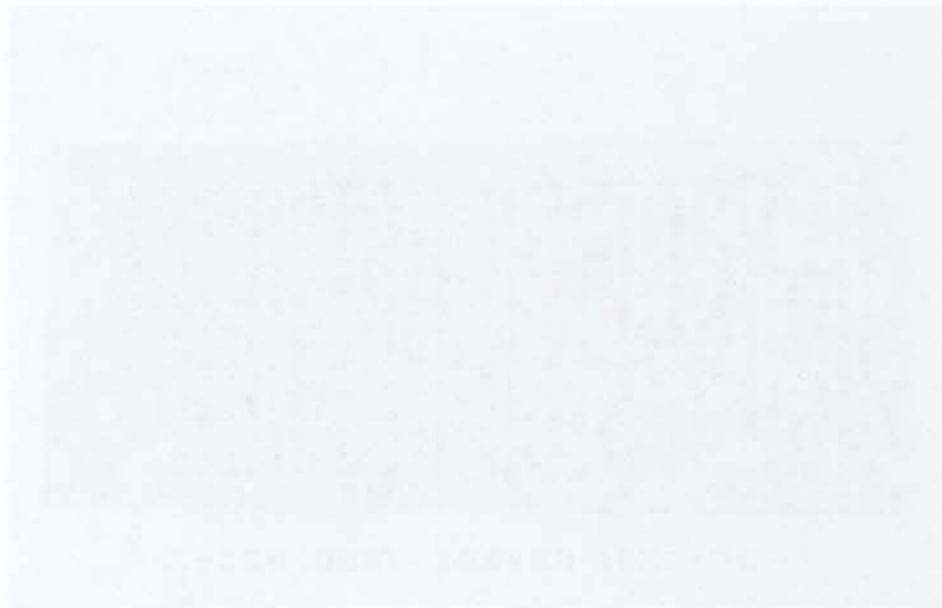
愛媛大学図書館 鈴鹿文庫蔵書 『宗鏡録』卷第二十二

## § 『宗鏡録』解説

全100巻、961年永明延寿（えいめい えんじゅ、904～975）作。中国禅宗5派の一つである法眼宗に属する著者が、以心伝心を説き、仏心宗といって、心を中心課題とする禅宗における心と、天台・華嚴・法相等の教宗諸派で説く心とが、いかに異同するかをあらゆる例証を挙げて論じ、禅と教を融和会通させようとしたもの。書名の〈宗鏡録〉とは、序文に「一心を挙げて宗となし、[一心が] 万法を照らすこと鏡の如し。古製の深義を編連し、宝蔵の円詮を撮略し、同じくここに顕揚す。これを称して録と曰う」とあるごとく、万法を照らす鏡としての一心について、諸仏の大意や経論の正宗を詳述した書であることを意

味する。全篇は標示章・問答章・引証章の3部に分かれる。第一部は総論概説で、第一巻の大半を占める。第二部は心に関する教禅諸宗の異同について問題を提起し、経論の文を挙げて詳述したもので、第93巻に及んでいる。第三部は上記の論述をさらに強調するために、三百余の文を引証したもので、第94巻以下の7巻からなる。禅家の著述であるためか、3部ともに教理的な分類整理がなく、従って内容も解りにくい。経論章疏などの博引傍証は百科全書的意味があつて、唐宋時代の禅や教に関する研究に対しては、重要な参考資料となる。ことに今日失われる逸書、逸文等の引用は極めて貴重である。研究としては水野弘元『鏡宗録要義条目』、志玄無極『鏡宗録抄』がある。

(水野弘元他『仏典解題事典』第212頁、春秋社、2001年)



### 5. 2. 2 『鏡宗録』

『鏡宗録』は、唐の慧鑑(870-1000)の著述である。慧鑑は、唐の禅宗の僧侶で、慧能の法脈を承継した。この書は、慧鑑の著述で、禅宗の教義を論じた。全書は、標示章・問答章・引証章の3部に分かれる。第一部は総論概説で、第一巻の大半を占める。第二部は心に関する教禅諸宗の異同について問題を提起し、経論の文を挙げて詳述したもので、第93巻に及んでいる。第三部は上記の論述をさらに強調するために、三百余の文を引証したもので、第94巻以下の7巻からなる。禅家の著述であるためか、3部ともに教理的な分類整理がなく、従って内容も解りにくい。経論章疏などの博引傍証は百科全書的意味があつて、唐宋時代の禅や教に関する研究に対しては、重要な参考資料となる。ことに今日失われる逸書、逸文等の引用は極めて貴重である。研究としては水野弘元『鏡宗録要義条目』、志玄無極『鏡宗録抄』がある。

## § 愛媛大学図書館 鈴鹿文庫蔵書『中阿含經』卷第五十六

中国の宋王朝（12世紀後半）の時代に刊行された版本（木版刷り）のテキストである。中阿含經とは「阿含經のうちで中くらいの長さの經を収録したもの」の意。

京都市東山区にあった三聖寺（さんしょうじ）の開創時（1249～1256頃）、沙弥行蓮によって一切經がおさめられたが、文化5年（1808）、三聖寺の經藏を撤去した際、近江の学僧・佐々木海量が所有することとなり、その後各所に分散したと見られる。本学所蔵のものは、その一冊と考えられる。



## § 『阿含經』解説

阿含はサンスクリット語アーガマ (Agama) の音写。もと伝承された教えの意、ブッダの教えを伝えた聖典。

教団の規則を決めた律に対し、ブッダの言行を伝え、その説法を集成したのが阿含。時に法 (ダンマ Dhamma) と同義に用いられる。原始仏教時代には、ブッダの弟子や信者がブッダから聞いた教えを憶えやすい詩や短い散文の形にまとめて、これを口から口へと伝えていた。つまりブッダの教説は「梗概要領」としてまとめられ、記憶によって伝承されていた。ブッダは自分の説を何か固定した著書や筆録等の方法で保存したり、伝授したりすることはなかった。今日、ブッダの教説が残っていると看做しても、こうした説法の梗概要領以外にはない。この梗概要領は、最初各自思い思いの方法で記憶されていた。しかし教団が確立し次第に充実してくると、ブッダの教説の梗概要領に何らかの統一整備が必要となった。その結果、梗概要領にある特定の文学形式を与え、それによって聖典としての

権威あらしめ、かつ記憶に便利にした。この文学形式はやがて「九分教」とか「十二分教」とかの名称によってまとめられた。(中略)

ブツダの説法を直接聞いた弟子や信者たちは、この九分十二分教のような簡単な梗概要領だけで、ブツダが説法した時の情景や詳しい言葉の説明が十分よみがえってきた。しかし一度これを他に伝える段になると、その梗概要領に加えて、説法の時・場所とか人物とか詳しい説明が必要となった。したがって、梗概要領には多くの詳しい附属的説明を加えて伝承されてきた。同時にこの類型にはまらないが、すぐれた文学性をもつ経典も作られるようになった。九分十二分教はもともと梗概要領の形式を分類したもので、附属的伝承等までも広く包含するブツダの言行録ないし聖典の具体的分類としては適当でなかった。そこでブツダ入滅のころから次第に仏教聖典を集大成して、一方では教法を教蔵(スツタ・ピタカ Sutta-pitaka)としてまとめ、他方では修行僧と教団の規則規定を律蔵としてまとめた。ここに経・律2蔵が成立した。経蔵は最初、長・中・相應(または雑)・増支(または増一)の四つに分けられ、分類名に阿舎の名が用いられた。のち第五の阿舎を立てる傾向も生まれ、また阿舎の代わりに部(ニカーヤ Nikaya)という分類名を用いる一派も生まれた。『阿舎経』は単なる一経の名ではなく、これら経蔵全体に対する総称である。

(『仏典解題事典』第60—62頁、春秋社、2001年)

展示出展一覧

	資料名	形態			請求記号
1	宗鏡録	刊折 1 冊			
2	中阿含經	刊折 1 冊			
3	和漢軍書要覧 上・下	刊小 1 冊	安永 7		020/Su3
4	近代名家著述目録	刊横 5 冊	天保 7		027.3/Su1/1-5
5	日本書紀 (神代卷)			67 冊	173/Su40~
6	日本書紀 第 10 応神紀	2 軸	大正 9		173/Su55/362-363
7	日本書紀 卷第 11	1 軸		藤原能信筆	173/Su44/364
8	舊鈔日本書紀 推古紀 皇極紀	2 軸		藤原能信筆	173/Su45/358-359
9	中臣祓			21 冊	173/Su4~24
10	古語拾遺			15 冊	173/Su25~39
11	日次紀事	刊 12 冊		貴重図書	386/Su1/1-12
12	桂の落葉			香川景樹	911.1/Su201/1-2
13	あしてかき和歌		明治 27 写	小沢蘆庵	911.1/Su129
14	源氏物語	写 40 冊			913/Su6/1-40
15	狭衣	刊半 12 冊		下紐刊半 4 冊	913/Su9/1-16
16	平家物語	刊 11 冊	宝永 7 年		913/Su20/1,3-12
17	大和物語	写 1 冊		貴重図書	913/Su14
18	方丈記			19 冊	914/Su4~22
I	俳家先哲墨蹟鑑	44 点			
II	多田満中 (絵巻)	2 巻			



## 内容

すぎょうろく

### 1 宗鏡録 巻第22

中国の宋王朝（12世紀前半）の時代に刊行された版本（木版刷り）のテキストである。

鎌倉時代中期、弘長元年(1261)に、金沢文庫(神奈川県横浜市)を創建した北条実時自身が中国に使者をかわし求め、一門の菩提寺である称名寺(しょうみょうじ)に寄進した宋版一切経(そうはんいっさいきょう)に含まれていたもので、歴史的に由緒あるものである。金沢文庫は、この「宗鏡録」も含めて宋版一切経すべてを国の重要文化財の指定を受けている。

昭和九年発行の「書誌学」2ノ5～6に、金沢文庫長の関靖博士の「金沢文庫書誌論考」(『金沢文庫研究紀要』第2号)が掲載されているが、その中にすでに鈴鹿三七氏所蔵の宋版「宗鏡録」巻22が、もとは金沢文庫の宋版「宗鏡録」全100巻の一部だったと言及される。したがって、現在、本学図書館が所蔵する「宗鏡録」巻22は鈴鹿三七氏が金沢文庫所蔵のものを昭和9年以前に入手したものと考えられるが、その経緯は不詳である。

ちゅうあごんきょう

### 2 中阿含経 巻第56

中国の宋王朝（12世紀後半）の時代に刊行された版本（木版刷り）のテキストである。

中阿含経とは「阿含経のうちで中くらいの長さの経を収録したもの」の意。

京都市東山区にあった三聖寺(さんしょうじ)の開創時(1249～1256頃)、沙弥行蓮によって一切経がおさめられたが、文化5年(1808)、三聖寺の経蔵を撤去した際、近江の学僧・佐々木海量が所有することとなり、その後各所に分散したと見られる。本学所蔵のものは、その一冊と考えられる。

わかんぐんしょようらん

### 3 和漢軍書要覧 上下

吉田一保(よしだ いっぼう) 安永7年(1778)

和漢軍書を年序的に列挙して各書の概略を紹介したもの。

和軍書之部では「日本王代一覧」より「清正記」に至り、唐軍書之部では「通俗十二朝軍談」より「明清軍

談國性爺忠義傳」に至る。全て数十部を略解している横綴小冊子。

きんだいめいかちよじゅつもくろく

### 4 近代名家著述目録

堤朝風(つつみあさかせ) 天保7年(1836)

元和年代以来の著述家427人の著書目録。各家をその姓名の「いろは順」に配列し、各、字、号、通称などを腰書し、その著作の全部を列挙し、書名の下に巻冊数を記している。序によると文化8年(1810)辛未の作らしい。

にほんしよき じんだいかん

### 5 日本書紀 神代巻 67冊

日本書紀は神代より持統天皇に至る漢文・編年史。30巻、系図1巻(現存せず)。その中の第1、2巻が神代にあたる。六國史の第一にして、『古事紀』に次ぐ旧史。

こちらの67点で、寛永版本から明治初期までの神代巻の版本をほぼ完全に網羅している。

にほんしよき

### 6 日本書紀 巻第10 応神紀 2巻

大正9年(1920)

第10巻 応神天皇 在位期間不明

4世紀後半から5世紀初頭頃の人。

にほんしよき

### 7 日本書紀 巻第11

藤原能信(ふじわらのよしのぶ) 筆 複製 玻璃版

第11巻 仁徳天皇 在位 395～427

藤原能信は、藤原道長の五男で母は左大臣源高明の女・明子

きゅうしようにほんしよき すいこき こうぎよくき

### 8 舊鈔日本書紀 推古紀 皇極紀 2

巻 藤原能信筆 複製 玻璃版

第22巻 推古天皇 在位 592～628

第24巻 皇極天皇 在位 642～645 双方とも女帝。

なかとみのはらえ

### 9 中臣祓 21冊

毎年6月及び12月の晦日に朝廷で行われた公儀の大祓は、古くから中臣氏が祭事を掌り、大祓の行事及び大祓の詞を読むことになっていたため、大祓の行事及び大祓の詞のことを「中臣祓」と称するようになった。

その作者は、諸説あるが不明。ここでは様々な解釈本や注釈本を展示。

こごしゅうい いんべのひろなり

10 古語拾遺 15冊 齋部廣成

齋(忌)部氏より奏進された愁訴状で、奈良時代以降、中臣氏と対立していた忌部氏に伝えられた古伝承の記録。『古事記』『日本書紀』に見られない伝承もあって古代史研究にとっては貴重な文献の一つ。

ここでは江戸時代の版本・写本、様々な注釈書を展示。

ひなみきじ くろかわみちすけ

11 日次紀事 12冊 黒川道祐

京都を中心にした年中行事の解説書。日々の行事を節序・神事・公事・人事・忌日・法会・開帳の順に表し、閏月や臨時の行事は年末に収めている。行事の実情・風俗・人情・言語などを多彩に盛り込んだ史料である。孤本でとても貴重。

かつら おちば かがわかげき

12 桂の落葉 2冊 香川景樹

香川景樹は、江戸後期の歌人。号は桂園・梅月堂など。養父香川景柄を通じて小沢蘆庵に私淑。のち「しらべ」の説を提唱して独自の桂園歌風を創始する。

おざわろあん

13 あしてかき和歌 小沢蘆庵

明治27年写(1894)

小沢蘆庵は、江戸時代中期の歌人。

「蘆手・あしで」という手法は主として平安時代に行われた書体の一つ。和歌を書く場合に、絵の輪郭の中に文字を隠して記し、その文字によって歌を表記するもの。

げんじものがたり

14 源氏物語 40冊 紫式部 近世書写

欠巻14冊：葵・賢木・須磨・薄雲・橋姫・推本・総角・早蕨・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋  
平安時代の物語。江戸期の国学者、本居宣長は『源氏物語』の本質を「もののあわれ」を知らしめる点であると説いている。

さごろも

15 狭衣 16冊

承応3年(1654)、下紐・天正19年(1588)  
狭衣の大将という主人公の和文の物語。4巻。作者は

六条斎院祿子内親王の女房宣旨(源頼国の女)とする説が有力。1040~80年代の成立か。

へいけものがたり

16 平家物語 11冊

宝永7年(1704) 2欠 15行本

戦記文学。12巻。作者未詳。13世紀前半成立か。

治承4年(1180)~元暦元年(1184)に展開された源平合戦の描写を軸に、平家一門の興隆と滅亡とを、仏教的な無常観を背景に記している。

やまともものがたり

17 大和物語

平安中期の歌物語。作者不詳。

大和物語の流布本は二条家系統であるのに対して、本書は異本系の一本にあたり、天理図書館蔵の「御巫本」とごく近い関係にあることが認められている。正確な書写年代は不明で、室町中期以後の書写にかかるものとみられている。

ほうじょうき かもちちょうめい

18 方丈記 19冊 鴨長明

鎌倉初期の随筆。冒頭「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。」から世の無常を論じ、隠者文学の代表的な作品。ここでは様々な注釈書を展示。

はいかせんてつぼくせきかがみ

I 俳家先哲墨蹟鑑 44点

江戸期の俳人の短冊手鑑。

偽筆という点で言えば、このような手鑑は、偽筆真筆が混在する場合が多く、本書もその例外ではない。短冊はほぼ年代順に並べられていて、貞門、談林、蕉風、宝暦明和、安永天明という現代の俳諧史区分とほぼ合致している。

ただまんじゅう えまき

II 多田満中(絵巻) 2巻

「満中」は幸若舞曲を代表する一曲。現存諸本は語り本系と読み本系のものに分けられるが、本絵巻は読み本系に属する一伝本と考えられる。読み本系のものには、奈良絵本の体裁のものが十本近く知られているが、絵巻は本絵巻以外にはなく、成立は江戸中期頃と推定される。